

環境文学入門： 自然とのコミュニケーションを回復する

加藤 貞通

1. 広々とした環境文学のコンセプト

環境文学の主題は人間と自然の関係である。人間と自然の関係を扱う表現はたいてい環境文学である。極めて単純なコンセプトである。ただし一旦、人間とは何か、自然とは何か、環境とは何か、と議論し始めるとそう単純明快ではない。人間、自然、環境、それぞれの定義については別の場所に譲り、本稿は環境文学研究の第一歩として環境文学の基本的概念を実例により紹介しつつ、エコ・コミュニケーション論の中に位置づけることを目標にする。

環境文学でいう文学 (literature) は広義の文学である。環境文学は、詩歌、小説、物語、戯曲、評論、随筆、日記などの芸術作品、いわゆる文芸・美文学を意味する狭義の文学を含むが、それを遙かに超えている。明治以来、日本の大学の文学部には、狭義の「文学」研究をする文学科の他に、哲学科と史学科が通常含まれていた。人文科学（人文学）と社会科学をひっくるめて広義の「文学」という概念で捉えていたのである。環境文学の「文学」はこの広義の「文学」と捉えれば分かりやすい。ただし言葉による文献ばかりでなく画像や音声、記号によるナラティブ（物語、語り）を含むほか、後述のように自然科学分野の諸成果をも含む。

環境文学は、人間と自然の関係を扱うのであるから、自然科学分野の研究成果が深く関わるのは当然である。自然科学分野の論考でもナラティブ（物語、語り）の形を取っていれば環境文学と呼べるものは沢山ある。例えば、チャールズ・ダーウィンの『ビートル号航海記』、ジャン・アンリ・ファーブルの『昆虫記』、スティーヴン・J・グールドの『パンダの親指』等々は、自然科学者の書いた著作であっても立派な環境文学と見なされることの実例である。しかし科学は一般に対象を観察者である人間から切り離して（客観的に）扱うこと、細かく専門化された知識の専門用語による記述に過度にこだわっていること等のため、人間と自然の関係性の表現およびコミュニケーションに失敗することが多く、従って残念ながら大抵環境文学としては評価できず、環境文学として扱われないことが多い。いかに多くの知識、あるいは深い知識が含まれていたとしても、その作品が人間存在との関係性の理解や表現力に乏しければ、コミュニケーションはうまくいかない。人文科学か社会科学、あるいは自然科学か、文系か理系かに拘わらず、関係や繋がり、または流れに注目する態度はいろいろな分野に見られる。なかでも特に縁

の深いのは19世紀半ばに始まった生物学の一部門、生態学 (ecology) である。生態学は生物と無機的环境および共に生活する他の生物との関係を研究する学問と定義されている。端的に言えば環境文学は、関係性に対する関心を生態学と共有する広義の文学と言える。

角度を変えてみれば、関係性に対する関心の背後には統合性 (integration) 志向が潜んでいることに気づく。生態学 (ecology) は他の自然科学諸分野と同じように分析的方法を保ちながらも、巨視的に統合的な世界把握を志向した点にユニークさがあった。対象を時空間上でミクロに見る、いわば顕微鏡的アプローチと、マクロに見る望遠鏡的アプローチを柔軟に使い分ける伸縮自在の視野により、生態学は統合的世界の表現力を獲得した。そして生態学的に見た統合的世界、すなわちエコシステム (生態系) が、人間と接触する各所で壊乱され、様々な程度の危機に瀕していることを示す点においてコミュニケーションにある程度の成功を収めることが出来たのである。成功例の筆頭は、アルド・レオポルドの『野性のうたが聞こえる』である。この作品は、今や環境倫理学および環境文学の古典として高く評価されている。このようなコミュニケーションの結果、生態学に内在する統合的世界の発想に共鳴して、いろいろな環境保全思想 (environmentalism) や生物学の領域を超えたエコロジー運動が盛んになった。しかしながら、生態学によって統合性志向が十分に展開されたとは言い難い。生物学の一分野としての生態学の正統的理解では、生態学的に見た統合的世界・エコシステムの中から人間を排除するのか、人間も一生物であるとしてエコシステムの中に人間社会も含めるのか、人間社会も含めるとすれば貧困や文化・歴史的慣習などをどう扱うのか等、人間の位置づけについて曖昧さがあった。環境保全思想やエコロジー運動が発展するにつれて、今では後者の理解、すなわちエコシステムの中に人間を取り込む見方が優勢になってきたが、人間社会や文化・歴史等、人間存在自体を統合する世界像を示すとなると、もはや生態学の領域を超えていることは明白である。

筆者の提唱しているエコ・コミュニケーション論は、社会経済的人間の領域、生態学的自然の領域、および精神的主体性の領域、これら三領域内および相互のコミュニケーションの統合として世界を理解する試みである。「エコ・コミュニケーション」という用語は、私が気づいた限りでは、哲学者・尾関周二が『環境問題と人間・自然観』(尾関『環境哲学の探究』)の中で、また電通エコ・コミュニケーション・ネットワークが『環境プレイヤーズ・ハンドブック2005——サステナブル世紀の環境コミュニケーション』の中で用いている。その用語が意味するところは、彼らの場合概ね「受け手の環境意識を啓発し、環境行動を喚起することを意図し、工夫されたコミュニケーション」(電通エコ・コミュニケーション・ネットワーク 180)の意味で使われているのに対し、私の場合は上述のように統合的世界の構造的理解を促進する用語として使っている点で異な

っている。とはいえ、彼らの問題意識には深く共感できる。尾関は次のように彼の問題意識を述べている。

大量生産＝大量消費を軸とする現代資本主義の論理によって生み出された過剰な商品依存型社会が、外的自然のみならず、人間の内面的・精神的破壊をひきおこしている以上、自然の生態学的再生産と人間社会のコミュニケーションの生産の連関という問題意識においてまた、エコロジー問題とコミュニケーション問題は深く連関してくるのである。これを私なりの表現で言えば、エコ・コミュニケーションの問題ということができよう。(尾関『環境哲学』 45)

尾関の表現を借りて言えば、環境文学はまさしく「自然の生態学的再生産と人間社会のコミュニケーションの生産の連関」を主題としているのである。また「過剰な商品依存型社会が、外的自然のみならず、人間の内面的・精神的破壊をひきおこしている」事態に対処するうえで不可欠なコミュニケーション、すなわち、事態の認識と問題意識の深化、更には内面的・精神的変革のために環境文学は大いに寄与できる。環境文学に期待できるのは、筆者の唱えるエコ・コミュニケーションの三領域の中でも、とりわけ精神的主体性の領域におけるコミュニケーションについてである。20～21世紀の文化・社会・経済的状况に取り巻かれ・浸透されて生きる同時代人がその状況を生き延びるには、「生命・生態系こそ生活世界としての社会を成り立たしめている基盤だという認識」(尾関『人間学』 214)と共に、我々の内面的意識それ自体を成り立たしめている基盤もまた身体性を介して生命・生態系、すなわち自然に他ならないという認識を深めることが必要であるが、それには外的自然とのコミュニケーションおよび自己内奥の自然とのコミュニケーション(対話)両方を回復しなければなるまい。言い換えると、人間が内面的に意識の働きで作り出す精神的世界は、外的な物質的自然界とは別個であり別格であるという錯覚の修正・変革が必要なのである。環境文学はその修正・変革の一助になる。問題の事態が、大半は人間の自己矛盾によって引き起こされているのであれば、人間自身の意識変革なしに、様々な意味で他者の所為にしたり、あるいは只ひたすらテクノロジーに解決を期待してばかりいては、事態がいつそう悪化するのみであろう。外的自然に触れることすら容易でない時代に、外的および内的自然とのコミュニケーションを回復せよと言われても戸惑いが増すばかりだ、と反応が返ってきそうである。それぞれ自分に合った環境文学を見つけ、自然とのコミュニケーションを試みていただきたいものである。精神的主体性の領域において自然とのコミュニケーションを回復すれば、やがて社会経済的人間の領域も、はるかに大きな生態学的自然の領域の中に包まれ生命

のコミュニケーション（循環・相互的生成変化）が維持されていることに気づき、自ずから生命を育む自然の力が湧き上がってくるだろう。

2. 里山の環境文学：自然界とのコミュニケーションを回復する

環境文学の具体例を見てみよう。次に引用する今森光彦著『萌木の国』の中で、少年が「樹上にはまったく手の届かない世界がある」と感じる場面は大変興味深い。

再び、雑木林への情念が燃え始めた。

こんな思い出がある。少年のころ、雑木林にクワガタムシを採りに行ったときのことだ。林に入ってもなく、こずえの樹液に群がる虫たちを発見した。私はいつものように幹に蹴りをくらわせた。こうすることによって、クワガタムシは、脚を縮めて容易に落ちてくる。ズーンという唸りとともに微震が枝先まで伝わると、真っ先に臆病なチョウたちが、羽ばたいた。彼女らは、とりあえず手近な葉のなかに隠れ場を求めた。ひと足遅れて、カナブンが白濁した排泄物を吹き飛ばしながら飛び散った。彼らは、蜜の園には未練がない様子で、そそくさと白い空に消えていった。そのとき、私はいつもとは違った光景を見た。一匹のクワガタムシが私を睨みつけていたのである。雄牛のような角をもったノコギリクワガタが、はるか下界を見下ろしていた。

森の聖者。そんな雰囲気だ。

「こいつ、この俺をなめとるんか……。」

私はそう思った。そう思いながら、樹上にはまったく手の届かない世界があることをうすうす感じた。

（今森 12-13）

少年は、「こいつ、この俺をなめとるんか……。」と「思った」と述べている。「なめる」とは相手を見下す意味である。その一方で、「樹上にはまったく手の届かない世界がある」ことを「うすうす感じた」と述べている。無論、「手が届かない」というのは、単に物理的に高すぎるという意味ではないだろう。一体いかなる意味で「手が届かない」のであろうか。「こいつ、この俺をなめとるんか……。」と「思いながら」、他方で「手の届かない世界がある」ことを「うすうす感じた」と言うが、「思う」と「感じる」ことがこのように食い違っているのは何故であろうか？——このような自然と人間との関係を主題とする著作が、近年大きな注目を集めるようになってきた。ネイチャーライティングまたは環境文学と呼ばれている。背景には世界各地で進行中の様々な環境悪化がある。

“ネイチャーライティング” (nature-writing) は一般に、自然と人間との関係を主題とするノンフィクション・エッセイを指す。自然・環境を扱う野外ガイド、日記や紀行文、科学的または哲学的・文明論的考察、ドキュメンタリー映画なども含まれる。“ネイチャーライティング”と、詩や小説、演劇など従来の文学ジャンルの自然・環境に関わる著作とを併せた、より広い範囲をさす“環境文学” (environmental literature) という用語は欧米の大学の科目名などにおいても使用され始めている。最近では、これら二つの用語の定義の違いにはこだわらず、両者をひっくるめて研究対象とする学会が出来ている。(米国のASLE — Association for the Study of Literature and Environmentの略 — は1992年に発足。日本ではASLE-Japan／文学・環境学会が1994年に発足。英国ではASLE-UKが1998年に発足した。その後ニュージーランド、カナダ、インド、韓国、ヨーロッパにASLEが次々誕生している。) 従来の文学においては、どのジャンルであれ、主要な関心は人間に向けられていた。自然が表現されることはあっても、それは人間の活動の背景として、または人間の世界の出来事の比喩や飾りとして扱われる傾向があった。「人間にふさわしい研究は人間である」(ポープ) という言葉が従来の文学研究のコンセプトを要約している。これに対し、関心を人間の世界に限定せず、人間外の世界に開こうとするのがネイチャーライティング／環境文学研究のコンセプトである。新しいコンセプトに基づく研究活動が盛んになるにつれて、続々新しい著作が生まれ出され、また長い間注目されることなく眠っていた古い作品が息を吹き返している。ちなみに新しい環境文学のコンセプトに基づく研究活動はエコクリティシズムと呼ばれている。ASLEのホームページを見ると、エコクリティシズムは学際的であることが強調され、文学研究者をはじめエコノミスト、ジャーナリスト、哲学者、心理学者、科学者、歴史学者、環境に関心を持つ芸術家たち(画家、写真家、音楽家、作家、映画制作者、etc.) 等々、多方面の人々に環境文学に関する議論や研究への参加を呼びかけている。

この新分野の発祥の地はアメリカで、学会発足もアメリカが最初である。しかしこういう表現の営み自体は今に始まったことではなく、古くからあったものである。欧米の場合ネイチャーライティング／環境文学の源流は、自然誌 (natural history) の伝統であるといってよいだろう。有名な作品の例をあげておくと、イギリスではアイザック・ウォールトン『釣魚大全』(1653)、ギルバート・ホワイト『セルボーンの博物誌』(1789)、ドロシー・ワーズワス『ドロシー・ワーズワスの日記』(1798-1803)、それからチャールズ・ダーウィン『ビーグル号航海記』(1839) などがある。アメリカでは、ヘクター・セント・ジョン・ド・クレヴクール『アメリカの農夫の手紙』(1782)、スーザン・フェニモア・クーパー『いなかの時間』(1850)、ヘンリー・デイヴィッド・ソロー『森の生活——ウォールデン』(1854) などがよく知られている。＜参考文献：文学・環

境学会編『たのしく読めるネイチャーライティング——作品ガイド120』（ミネルヴァ書房2000）＞

発祥地アメリカのネイチャーライティング／環境文学を特徴づけるものの一つは、ウィルダネス (wilderness) の概念である。なかでも深くウィルダネスに関わるアメリカの古典的作品としては、前述のソローの著作の他、雄大なシエラネヴァダ山脈の原生自然が大好きで、神殿のごとく尊んだジョン・ミューア著『山の博物誌』（1894）があげられる。ウィルダネスの概念は、19世紀から20世紀にかけて、否定的な意味合いから肯定的な意味合いに変化してきた。概念の変化につれ和訳語も変わってきた。聖書やアメリカ大陸開拓に関連するコンテクストの中では否定的な意味合いをこめて荒野（あら、あれの、こうや）と訳されてきた。が、ネイチャーライティングでは肯定的に捉えられており、原生自然とか野性の自然と和訳されている。手つかずの自然と訳されることもあるが、先住民の存在を考慮に入ると、必ずしも適切な訳とは言えない。ウィルダネスの肯定的な評価は、エコロジー（生態学）の観点から見て十全な土地という意味合いと、近代文明に縛られていない自由な生き方の土地という意味合い、の2点において主になされているようである。前者の意味合いを更に深く追求した著作としては、環境倫理学の先駆者と見なされているアルド・レオポルドの『野生のうたが聞こえる』（1949）がある。後者の意味合いでは、北米大陸は亀が海底から運んできた泥から創られたという北米先住民の神話に基づくゲーリー・スナイダーの詩集『亀の島』（1974）や、エッセイ集『野性の実践』（1990）などがある。

世界各地の生態系は様々である、またそこに住んでいる人々の暮らし方も様々である。当然ながら自然と人間の関係を主題とするネイチャーライティング／環境文学の特徴は、その土地により様々である。では日本のネイチャーライティング／環境文学にはどんな特徴があるだろう。言うまでもなく日本列島はアメリカ大陸ほど広大ではない。人口密度はより高く、また気候や文化・社会的背景が異なるから、歴史の過程で培われてきた自然観も異なる。そういったいくつかのレベルの比較は省略して、ひと口で日本のネイチャーライティング／環境文学の特徴を言い表すならば、身近な自然をあつかったものが多い、と言えるだろう。この特徴は、近代文明に組み込まれた日常社会の外へ遠く離れた（その意味で自由な）自然の地、すなわちウィルダネスに向かう傾向を持つアメリカのネイチャーライティング／環境文学とは、一見、正反対の方向性をもっているように見受けられる。

冒頭に引用した雑木林に関わるエッセイは、身近な自然への傾斜をもつ日本のネイチャーライティング／環境文学の典型である。著者の今森光彦は写真家・エッセイストで、琵琶湖の北西に位置する山地の雑木林や田圃の四季の風景、様々な昆虫や草花などのすばらしい写真とともに、雑木林でのいろいろな体験や、そこで生業を営む人々の暮らしについてエッセイを綴っている。彼が写真に撮り、エッセイで物語る身近な自然とは、

最近「里山」と呼ばれている世界に他ならない。彼は、『里山物語——In Harmony with Neighboring Nature』（1995）、『里山の少年』（1996）、そして『萌木の国——The Grove Land, My Little Cosmos』（1999）と、里山をテーマにした3つの作品を発表している。里山は古くからあった言葉で、奥山に対して、「人里近くにあって人々の生活に結びついた山・森林」（広辞苑）の意味であるが、1960年頃から急に注目されるようになった。50年代の終わりから60年代は、農家が、里山を伝統的な方法で利用することが少なくなり、その結果、里山が荒れて自然のままの状態に戻りはじめるか、あるいは住宅地やゴルフ場、道路などに開発されて、里山の風景が大きく変貌し始める時期にあたる。今森光彦の写真集には生き生きとした昆虫や、動植物の生態とともに、昔懐かしい田園風景が写し出されている。そこに漂うノスタルジーは、せいぜい40年か50年程度前の世界への個人的郷愁を超えたインパクトがある。恐らくは数千年来、日本列島の住人が親しんできた世界が失われつつあることから生じる深い感慨であると思われる。春の七草、秋の七草、稲、ヤマザクラ、フキノトウ、ドングリ、きのこ、アマガエル、メダカ、ホタル、ドジョウ、フナ、ウサギ、キツネ、フクロウ、等々古くから使われてきた日本語の語彙が、どれだけ多く里山の動植物や風景、人々の暮らし方と結びついているか数え上げてみただけでも、今失われつつあるものがいかに古くから親しまれてきた自然であり、また文化であるかが分かるであろう。里山の風物は、比喩的・文化的な意味でも、文字通りの意味でも日本人の血肉なのである。

里山の自然が身近だということは、それが文化の内部に取り込まれた自然で、人間の思い通りになる世界だということだろうか。どうやらそうではなさそうである。冒頭の引用において昆虫採集の少年が、クワガタムシを見上げて「こいつ、この俺をなめとるんか……」と「思いながら」、他方で「森の聖者」のような雰囲気や、「樹上にはまったく手の届かない世界がある」ことを「うすうす感じた」というのは、まさしくこの点に関わっている。クワガタムシの世界は、人間が長年にわたって手入れをしてきた雑木林の中にあり、確かに人間にとって空間的に身近な場所にある。が、しかし人間の文化に制約されない高い位置にある「まったく手の届かない世界」だと少年は感じたのである。クワガタムシという言葉や、木を蹴ってクワガタムシを採集する方法、雑木林を維持・利用する伝統的な方法、これらはみな文化である。その文化は少年の思考に大きな影響を及ぼしている。「こいつ、この俺をなめとるんか……」と人間の優位性を基本とする自意識をかきたてるのは少年の思考を支配している自己中心的文化の仕業である。他方で、人間の自己中心的文化の影響（人間中心主義）の壁の向こうに「森の聖者」の雰囲気や、「まったく手の届かない世界」があることを「うすうす感じた」、つまり謙虚な心持ちを抱かせたのは、少年の身体性（あるいは感性）の仕業とってよいであろう。実は、クワガタムシに出会って神聖な世界の存在を感じ取ることは、身体の中に眠

っているもう一つの別な文化の所為と言えるのかもしれないし、また、それは身体に備わった自然な感性の所為とも言うべきかもしれない。そこでは文化なのか自然なのかはつきりしない複合的性質の出来事が起こっているようである。区別しにくいものは無理に切り離さず、身体性と呼んでおこう。

このように考えると、日本のネイチャーライティング／環境文学は、ウィルダネスに向かうアメリカのそれと一見正反対の方向性をもっているように見えるが、——少なくとも今森光彦の場合——人間の日常において優勢な自己中心的文化（人間中心主義）に制約されない「手の届かない世界」に感性の窓を開き、その存在を認知するという点では、特徴が一致していることになる。その特徴には身体性が深く関わっている。ネイチャーライティング／環境文学では、自然の事物を観察したり、採取したり、写真に撮ったり、樹木を切り倒したり、土を耕したり、山に登ったり——つまり観察するばかりでなく、身体的に参加する行為が重視される。クワガタムシが雑木林という文化の中に生きていながら人間の文化に支配されているわけではないように、感じる身体は、日常的文化の影響下にありながらその文化に完全に支配されてはいない。そのような意味で、人間の身体性と動植物などの人間以外の生物は、種としての繁栄の度合いとか優劣とは無関係に、共にこの時空間に参加し、この世界を共有しているといえることができる。里山は、いろいろな生き物が共存し共有する場所である。

里山は、いろいろな生き物が共存共有する場所だということを言い換えて、里山は自然界とのコミュニケーションの場所だと言うこともできる。「自然界とのコミュニケーション」と言っていると、クジラの言葉が分かるとか、バラの花と会話できるというように自然の事物との言葉による意思伝達を連想するかもしれない。が、あいにく普通の人間には、そのような能力は備わっていない。知識や情報の伝達の仕方は、言葉による伝達方法がすべてではない。伝達手段＝言葉の発想にとらわれずに、生態系には様々な形態の情報伝達のネットワークが機能していることを先ず知るべきである。それにまた、コミュニケーション（communicate）という英語は、普通「（知識、情報などを）伝える、知らせる」意味で使われているが、そればかりではない。この語は、コミュニティー（地域共同体 community）や、コミューン（親交する、懇談する commune）などの語と共に、ラテン語のコミュニカーレ（communicāre）“to impart, make common”を語源としていて、古くは「共にする、あずかる（share in, partake of）」の意味で使われていた。それ故に里山は、「情報を伝達する」の意味でも「共にする、あずかる」の意味でも、自然界とのコミュニケーションの場所だと言える。ネイチャーライティング／環境文学は、そういう意味での自然界とのコミュニケーション回復を目指す文学である。人間による収奪的利用（植民地化）がいっそう深刻になりつつある自然界の健康と、その一部としての身体をいかに回復するのか、今すべての人が問われている。

3. 里山のテーマの多面性

自然界とのコミュニケーションにはいろいろな意味合いがあり、実に多面的である。実際に里山に関係する作品にはどのようなものがあるかを概観してみよう。それにはまず里山の定義が必要であるが、まだ形成途中の新しい用語であるから、人によって幾分違いがある。ここでは日本自然保護協会による里山の広い定義をあげておく。

《日本自然保護協会による定義》

「里やま」とは：伝統的な農林業と結びついて維持されてきた雑木林や松林、規模の小さなスギやヒノキなどの植林地、竹林や鎮守の森、これらの林は「里山」と呼ばれ、農村の自然には欠かすことのできない存在である。私たちに懐かしいふるさとを思い起こさせてくれる農村の風景は、これら林のほか、田んぼや畑、小川や湿地、ため池、草はらなどさまざまな環境がセットで成り立っている。そしてそこにはさまざまな生き物がくらし、神社やお寺、農家、路傍の石仏など人の生活、人と自然のかかわりも存在している。このような、農村の風景を形づくっているものすべてを含めてこの場を「里やま」と呼ぶことにします。また、里やまの自然の一部が残された斜面林や湿地、都市の中の緑地なども里やまに含めて考えている。

（日本自然保護協会「里やまでのふれあい活動」）

この意味での里山の自然が記述された文献としては、万葉集や古代の風土記までさかのぼることになり、数え切れないほど例はある。意識的に読者の注意を里山の自然に引きつけようと意図したのは、明治以降のことのようである。国木田独歩『武蔵野』（1900）、徳富蘆花『みみずのたはごと』（1907）、島崎藤村『千曲川のスケッチ』（1912）、柳田国男『雪国の春』（1918～27）、宮沢賢治『注文の多い料理店』（1924）などには、里山という名前は使われていない。しかし、そこに描かれているのは里山の風物にほかならない。どの作品も身近な自然の美しさを描きつつ（審美的観点）、それぞれに个性的なし方で、自然と人間の結びつきの深さに注目している（民俗学的・宗教的観点）、そして、その背景には急速に進行する近代化の風潮が強く感じられる（文明論的観点）。自然保護の観点も早くから登場している。南方熊楠の「南方二書」や「神社合併反対意見」（1911～12）は、鎮守の森などの身近な自然保護論の先駆けで、エコロジーの奥深い意味をいち早く訴えた文献として知られている（エコロジーの観点）。鉱害をあつかった荒畑寒村の『谷中村滅亡史』（1907）や田中正造の著作集、ダムによる里山の水没をあつかった井伏鱒二『朽助のいる谷間』（1929）も、広い意味での里山の保全に関わる環境文学と見なすことができるであろう。1960年ごろから、里山という言葉が盛んに使われだし、様々な専門分野の人が学際的に、里山に危機が迫っていることを発言するよ

うになった。林学、生態学、農業技術者など農林業の現場で仕事をしている人々の報告が多数ある。四手井綱秀『日本の森林——国有林を荒廃させるもの』(1974)、田端英雄『里山の自然』(1997)、森山昭雄、梅沢広昭編『日本人の忘れ物——海上の森はなぜ貴重か?』(2000)、宇根豊『田んぼの学校』(2000)、その他。哲学者やジャーナリスト、ナチュラリスト、また里山の復活の実践者等による農林業についてのエッセイは多数ある。富山和子『水と緑と土』(1974)、重栖隆『木の国熊野からの発信——森林交付税構想の波紋』(1997)、内山節『ローカルな思想を創る』(1998)、足立倫行『森林ニッポン』(1998)、井伊野雄二『里山の伝道師』(1999)等は、二酸化炭素吸収機能や洪水調節による国土保全機能、水源涵養・水質浄化機能、自然とのふれあい保健・休養機能、等々の多面的公益的機能を説いている。井上ひさしの『吉里吉里人』(1981)は、東北地方の小さな農村が、農政不在の日本国家から分離独立を企てるという笑いあふれる風刺小説で、ソーシャル・エコロジーの観点から見ればこれも環境文学の一種と言える。石牟礼道子の『天湖』(1997)は、生命の源である水の源泉として、里山をアニミズムの感性で描いている。宮崎駿のアニメ『となりのトトロ』(1988)は、里山のテーマがいかに幅広く現代日本社会に訴えかけるものであるかを証明している。ただし過去の社会の過度な理想化は禁物である。小山勝清著・高田宏編『心の民俗誌：里山からのメッセージ』(1998)はかつての農村社会の偏狭さと貧しさを伝え、同時に現代社会の思い上がりを戒めている。

文筆より自らの実践によって行うコミュニケーションを重視する人々は更に多くいる。幸いなことに彼らの何人かは貴重な環境文学を書き記してくれた。例えば、福岡正信著『自然農法・わら一本の革命』(1975)、川口由一著『妙なる畑に立ちて』(1990)、星寛治著『有機農業の力』(2000)、藤本敏夫著・加藤登紀子編『農的幸福論』(2002)、岩澤信夫著『不耕起でよみがえる』(2003)、藤田和芳著『ダイコン一本からの革命——環境NGOが歩んだ30年』(2005)、徳野貞雄著『農村の幸せ、都会の幸せ』(2007)等々、いずれも工業立国のかけ声に踊らされ、ますます大型の機械と化学物質による生産性・効率性向上に励んだ結果、国土と人々自身の身体に対する最悪の破壊産業になり果てた農業および日本の文化に再生の希望をもたらす書である。

里山のテーマは日本のネイチャーライティング／環境文学に顕著であるが、日本のものではなく世界中に共通する多面性(または多層性)を有している。里山の最も重要な構成要件は、その土地に合った持続可能な伝統的農林業や伝統的沿岸漁業が実施されていることで、低エネルギー消費社会と生物多様性尊重がその指標である。この特徴に合致する作品例は、アメリカの民俗生物学者ゲーリー・P・ナブハン著『雨の匂いのする沙漠』(1982)——このノンフィクションはアメリカ・メキシコ国境の砂漠を居住地とするトーノ・オーダム(パパゴ・インディアン)の天水農業や砂漠の暮らしを扱っ

ている、生産性・効率性追求の強力な潮流に流されることなく、ケンタッキーで農場を営む作家ウェンデル・ベリーも、日本における農村の過疎と里山の営みに共通するテーマを扱っている。その他、ジョゼ・ボヴェ著『地球は売り物じゃない!!：ジャンクフードと闘う農民たち』（2001）や、ジーノ・ジロロモーニ著『イタリア有機農業の魂は叫ぶ ～有機農業協同組合アルチェ・ネロからのメッセージ～』（2005）等、世界各地に多くの作品例が発見できそうである。環境文学は新しい分野であるから、自分でいろいろ発見できる楽しみがある。

引用文献表

- 電通エコ・コミュニケーション・ネットワーク編著『環境プレイヤーズ・ハンドブック 2005 —— サステナブル世紀の環境コミュニケーション』（ダイヤモンド社、2004）
- 今森光彦『萌木の国』（世界文化社、1999）
- 日本自然保護協会（NACS-J）「里やまでのふれあい活動」 5 January 2007 <http://www.nacsj.or.jp/old_database/satoyama/satoyama-000602-bosyu.html>
- 尾関周二「環境問題と人間・自然観」尾関周二編『環境哲学の探究』（大月書店、1996）19-58
- 『環境と情報の人間学—— 共生・共同の社会に向けて』（青木書店、1998）